

(続) もう一つの『秋山紀行』―高野辰之の秋山

大月 和彦

越後秋山の前倉から信州秋山の集落屋敷へ向かう。ぶなと楓の樹林を進む。脚下に見え隠れする中津川の流れは青く、川の音がかすかに聞こえる。歩くこと2里、樹林が途切れる。道端に石塔が4、5基。文字は刻んでなく、苔も生えてないので最近のものらしい。

ここから数町、赤倉山(烏甲山)から続く布岩という岩稜付近は猿が群棲するところ。厳冬期に雪が数尺積るころ、子猿が枝から枝に飛び移ろうとして岩角にぶつかり墜落する。悲鳴を聞いた親猿は助けようと子猿を抱いたまま命を落とす。村の人がこれを拾うという悲話を聞く。

屋敷から対岸にある小赤沢の集落に向かう。中津川に架かる橋を次のように描く。

「藍綻の激流岩に当りて奔騰し、流れ、瀬となり淵となれる様、凄き迄の流れにして悪寒身に迫るを覚ゆ、これに架せる橋の奇にして険なる、其比何処にかあらむ、橋の長さ僅かに廿余間に止まると雖も、兩岸より長き丸太を出たし、中央にてこれに添木をなし、これに径2、3寸の横木(をさと称す)を数寸毎に班らに置き、薄板2枚を並べたるものなり…。橋下は蒼暗淵なり、怒渦常に絶えずして幾仞の深さなるを知るべからず…」

半里余り、夕日が沈むころ小赤沢に着く。この辺は牛が多く、馬は秋山郷に入ってから一頭も見ることがない。

山田六之丞宅に宿す。苗場山に登る人のために始めたという宿。大きな時計が壁にかかっているのに驚く。85歳になる老翁が天保の大飢饉の様子を話してくれる。100軒あった家が20軒に、人口400人が100人を割り、飼っていた牛は食べつくしたという。途中で見た文字のない石塔はこの時のものらしい。

青年高野辰之は『秋山紀行』を次のように結ぶ。

床に入る。月が煌々として窓を照らすので眠れず外に出る。空には一片の雲もない。草に置く露が月の光にきらめく。思いは尽きることがない。このまま外で過ごすうと思ったが、明日「苗場山巔に異苔を摘まん約」があるので部屋に帰った。